実践報告

俳句により言語生活を豊かに
～表現と鑑賞の一体化をめざして～
To make language life enrich by HAIKU study
～ Trying to combine expression and appreciation ～

国語科　市　川　千恵美

要　　旨

２学年の時から、３学年の夏までのおよそ１年半かけて、俳句学習に取り組んできた。まずたくさんの句を読んで親しむことからスタートし、句作りや句会を通して表現と鑑賞の両面からアプローチすることや、句会での交流を通して鑑賞や表現を深めることなど、体験や活動を通して俳句に接することを重視してきた取り組みである。本稿は、その俳句学習の集大成として、伝えたいことを伝えるために俳句を活用するといった目的意識を明確にした単元「俳句に託したメッセージを贈ろう」を中心にその実践をふり返ってみたものである。俳句という韻文を文章に活用することにより、思いを伝えることの広がりと深さを認識したり、俳句そのものの持つ力をより明確に感じられたことが、生徒たちの作品や学習後の感想から認められた。これが、単に授業の中で終わるのでなく、今後の日常も含めた言語生活の中で生かされていくことも願うものである。

キーワード：俳句・鑑賞・表現・交流・伝える・目的意識・

Ⅰ　はじめに

現代社会、特に都市部で生活している生徒たちには、日常の中で日本本来の風土や季節感を感じる機会が減少し、必然的にそうしたものに裏付けされた言葉に対する感覚も乏しくなってきている。一昔前であれば、誰に教えられたというわけでもなく、当然知っているような植物や自然現象に関する言葉がピンとこない、解することができないということが珍しくない。同時にメール等での簡単な言葉のやり取りが日常化している中で、言葉は記号に近い単なる「ツール」という、表面的なところで扱われている傾向もみられる。

言葉とは風土や伝統に裏付けされた文化であるということを考えたとき、もっと深いところで言葉を考えたり、日本特有の四季折々の風土ということを言葉を通して見つめること、それによって言語生活を豊かなものにしていくことが、今の中学生にとって必要でないだろうか。以前のように家庭や地域で自然とそうした言葉の感覚が身につくという環境でなくなってきている今、より一層学校で意図的にそれを培っていく必要もあるだろう。

そして、「風土や伝統に裏付けされた」言葉や「四季折々の風土」ということを考えたとき、季語を含む17文字に集約された「俳句」の持つ力を活用して、それを生徒自身の言語生活の中に積極的に取り込んでいくことの意義が大きいと考えた。この取り組みは、単なる俳句の鑑賞でなく、創作したり、表現の手段として使ったりすることで、言葉感覚の幅と奥行きを広げ、言語生活に活かしていくことを試みたものである。また、世界的には短い詩の一つとして紹介され、広く知られているHAIKUであるのに、ややもすると、日本の中学生にとって「古くさいもの」というイメージでとら

えられがちである。そうしたイメージを払拭し、生徒たちが自国の伝統詩歌の価値を見いだしたり、俳句が「生きた」有効な表現方法であることに、気づかせたりすることも目指した。

Ⅱ目的・方法

1．目的

教科書に掲載されている教材や単元にとらわれず、鑑賞と表現の一体化と言語活動を豊かなものにしていくための俳句の授業を目指し、以下のような目的で取り組んだ。

（1）　俳句という古典の韻文学の持つ素晴らしさに慣れ親しむことを通して、日本語の言葉の裏にある力や感性を体感し、言語感覚を鍛え、豊かにする。

（2）　句作りと句会を通して表現と鑑賞の両面から取り組むことで、それぞれの力を相乗的に高める。

（3）　俳句を引用した手紙文を書き、思いを伝える表現手段として活用し、言語生活をより豊かなものにする。

2．方法と実践の経過

２年時から以下のような形で取り組みを開始した。

（1）2012年（平成２４）の４月～2013年（平成２５）の３月（２年時）

①　俳句に親しむ
- ・俳句のルール・文学としての特徴を知る。
- ・俳句手帳を配布（基本的な季語収録し作った句を記入するためのもの）
- ・歳時記の紹介

②　俳句を味わう
- ・たくさんの句を読む（４０句）
- ・好きな句を選んでコメント付け、俳句のミニブックをつくる。

③　俳句を作り鑑賞し合う
- ・それぞれの季節の句をつくる。(年４回)
- ・*1句会を春と秋に開く。(２回)
- ・選んだ句について意見を交換し合う。

（2）2013年（平成２５）の４月～７月（３年時）

①　俳句を作り鑑賞し合う
- ・４月の修学旅行での句を作る。
- ・句会を開く

②　俳句に託したメッセージを贈る
- ・自分の思いに合う俳句をさがす。
- ・俳句を引用した手紙を書く。

Ⅲ　単元の構想

1．本単元「俳句に託したメッセージを贈ろう」の実施までの生徒たちの実態

対象となる生徒たちは、授業者が３年間国語を担当してきた生徒たちであり、上記のⅡの２にある

ように２年時から、*2俳句のミニブックを作ったり、通年で句作りと「*3句会」を行ったりするなど俳句学習に取り組んできている。３年時では、*4修学旅行の「句作り・句会」を行うことで継続された。こうした鑑賞者・表現者の両面から繰り返し取り組んできた学習を通して、生徒たちは伝統的な韻文学に慣れ親しみ、その良さを理解する力を培ってきている。また、交流の場でもある句会では、互いの作品の良さを認め合う力も身に着けてきている。２年時において２回、３年時で１回、合計３回行った句会は、初回は教師が進行する形で行ったが、２回目は生徒による進行、３回目は６～７人の小グループでクラス全体で投句されたものについて句会を行い、そのグループで一ついいものを選として選ぶというように、ステップを踏んで、最後の「俳句に託したメッセージ」でグループでの鑑賞会につながるように進めた。表現意欲の旺盛な生徒達が、俳句を使った明確な相手・目的意識のある表現活動に生き生きと取り組むことや、鑑賞会での交流が、鑑賞や表現に対しての深まりや広がりとなることを期待し、３年時の最後の俳句に関する活動として２以下で示す「俳句に託したメッセージを贈ろう」を試みた。

２．ねらい
- 伝えたい人に、伝えたい思いを伝えるための適切な俳句を選び出し、鑑賞する。
- 俳句に託して伝えたい相手に思いが伝わるようなメッセージ（手紙）を書き、紹介し、交流し合う。

【指導要領との関連：３年Ｃ（１）オ・Ｂ（１）エ・ア伝統的な言語文化に関する事項（イ）】

本単元は、俳句（近代）に託し、伝えたい相手にメッセージとしての文章を書き、贈るというものである。ここでの俳句の引用は表現の方法であり、メッセージとしての文章は単に俳句の鑑賞にとどまらず、どのようなことを伝えたいのか、なぜこの句を贈るのかといった自身の伝えたい思いである。目的意識・相手意識を明確にして「書く」ことの必要性を実感して活動できるものとなっている。鑑賞者・表現者としての両方の力を必要とする学習の場を設定することで、その両方の力を相乗的に高めていくことが期待されるものである。さらに、「他者の俳句に託す」ことで、自分自身の思いを抵抗なく、より素直に表現しやすくなっているのではないかとも考えられる。

また贈りたい相手にふさわしい句を選ぶ段階で、自分の思いや伝えたい相手に適切なものかを考え判断するという活動が、生徒たちには自ずと思考する力を駆使し「探求の楽しさ」につながっていくと考えられる。同様にメッセージとしての手紙を書く際にも、相手に思いを伝えるという明確な目的のために、工夫して書くこと（表現すること）や、互いの作品を紹介し合う際に、作品の思いや表現

句会の方法

【一時間目】

一、　投句（全員）

二、　清記（先生）

*三～五まで進行は担当者がやる。

*【　】は担当者を決める。

【二時間目】

三、　選句（全員）　*二句まで。良い方に特選の印

四、　披講【　　】【　　】

*記録　清記用紙【　　】

選句用紙【　　】

五、　上位三位の入選句の発表　【　　】

*1　句会の1

	2
◎	8

風に乗り踊り始める紅葉の葉

さつまいも皮をめくれば黄金色

コメント

2の方は、紅葉が風でクルクルと回りながら落ちてゆく様子が目に浮かぶように感じたから。
8は、さつまいもの皮はむいた色で、黄金色と対比のように用いているのかなと考え、工夫されていると思ったから。

	◎
31	22

秋空や見上げて高く背伸びする

うろこ雲思わず手に取るかのごとく

コメント

22 空模様を撮りたくなるほどきれい、ということを遠まわしに言っているのがおもしろいと思いました。
どんな空なのか、想像する余地があるので他の句とちがって新鮮さ

＊1　句会の2　選句とコメント
（2年時）

＊1　句会の3　句会で選ばれた作品　春・秋
（生徒氏名は削除）

二学年　春の俳句大賞

互選（クラスのみんなで選句しあったもの）

松組

一位　花ぐもり見上げる心もねずみ色
二位　春けぶる虚空に円描(か)くとんびかな
三位　春嵐に竜がとどろく岩屋かな

蘭組

一位　龍の声轟きわたる春の闇
二位　たんぽぽや雨に打たれど胸張って
三位　暖かさかすかに含む春の雨
　　雨上がり山の向こうに春の虹

菊組

一位　青々とくだけて白き春の海
二位　すきとおる潮のかおりや春の風
三位　春雨や楽しき心をしめらせる
　　潮風で吹かれてゆれる春の海

梅組

一位　卯月風橋を渡れば潮香る
二位　春の空雲の合間にとんび舞う
三位　春の海何が不満で怒るのか

二学年　秋の句会互選入選句

各クラスで選句票が多かったベスト3

松組

一位　古都の町木々も色づき秋深し

二位　彼岸花夕日を浴びて赤み増す

三位　夕方に哀愁ただよう秋桜

富士の裾風にゆらめくすすきの穂

秋の声夜空と共に運ばれる

夜の空星の輝き秋の月

蘭組

一位　たわむれに猫が跳び付くいわし雲

二位　うろこ雲赤く染められ天照らす

秋空や見上げて高く背伸びする

三位　歩くたび葉と葉がこすれ秋かおる

菊組

一位　彼岸花澄んだ空へと背をのばす

二位　見上げれば漆黒の空浮かぶ月

三位　車道にて猫と見上げるうろこ雲

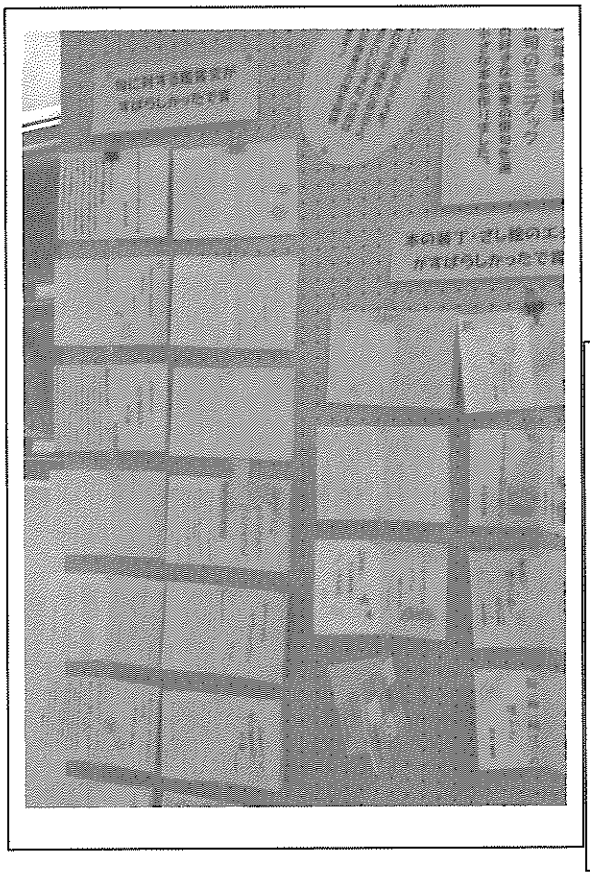
銀杏や道を占領踏み場なし

梅組

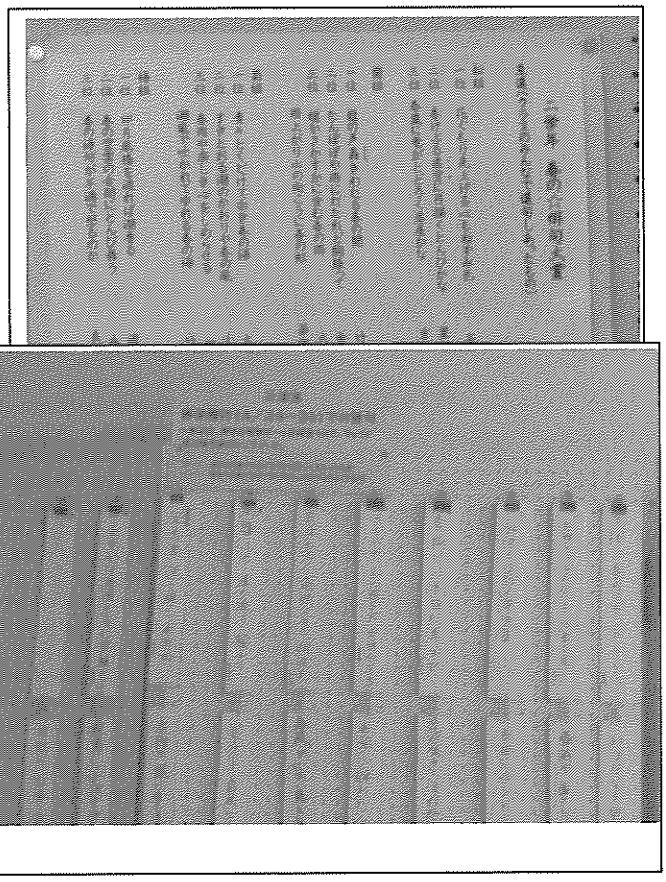
一位　風吹いて静かに微笑むすすきかな

二位　墓参り香る線香天高く

＊2俳句ミニブックの掲示



＊3　句会で各クラスで選ばれた作品の掲示



＊4　短冊に書いた修学旅行の句の掲示

の仕方を意識なしながら鑑賞し、鑑賞されるといった交流の場が「探究の楽しさ」を駆動していく場の提供ともなっている。

さらに、本校の３年生は帰国生がそれぞれのクラスに数名ずついるので、以下のようなことを考慮した授業づくりを行った。

まず目的意識・相手意識を明確にもって鑑賞し、表現する活動そのものが、学習への意欲的な取り組みにつながることが期待できる。また、生徒自身が句から全てを創作するのでなく、自分の思いにふさわしい俳人の句を使うということで取り組みに対するハードルが少し低くなっている。俳句を選ぶという活動では、選ぶ対象として教師の方で中学生が共感しやすそうな俳句の一覧表や、句を解釈する上で理解しやすい資料を用意するという点を配慮した。同時に、補助の教員に援助が必要と思われる帰国生については常に手助けができるようサポートしてもらっている。本単元に入るまでにも、１年時には学級通信で時節にあった俳句を英語訳つきで掲載したり、２年時の最初の俳句を扱う授業で、世界で作られているＨＡＩＫＵとして紹介したりと帰国生がこの伝統詩歌に興味関心をいだくよう段階的に取り組んできた。

３．単元の学習展開（全３時間）

第一時：贈りたい相手、伝えたい思いにふさわしい俳句を選ぶ。
第二時；俳句に託したメッセージ（手紙）を書く。
第三時：作品を紹介し合い、他の人の作品を鑑賞しよう。
第四時：まとめ（ふり返りと手紙を送るための清書）

Ⅳ　実践報告

１．第一時：贈りたい相手、伝えたい思いにふさわしい俳句を選ぶ

予想していた以上に、主体的に学習に取り組み、楽しんでこの学習に臨んでいる生徒たちの様子が見られた。資料３でこの単元学習の活動内容を確認し、句を選ぶ作業に入ったが、句を選ぶ段階からあれこれ句とにらめっこして、自分の意に合うものや伝えたい思いに合うものを懸命に探す姿は、まさに探求している学習者の姿であった。自分の思いに合う句を見つけるのは大変なようで、教師のところに質問に来たり、相談に来たりする生徒もいたが、どの子も投げ出すことなくよく取り組んでいた。司書の先生の協力により、俳句の鑑賞の参考になる様々な本を１クラスで十分に使えるぐらいの量がそろっていたので、生徒たちが、句を探す作業に大いに活用できた。教師が選句する俳句の候補としてそれぞれの季節から選んだ句を「季節の俳句一覧」としてプリント（資料１）にして配布していたが、それだけでは満足いかなかったようで、全体の３分の１くらいの生徒がそれ以外の資料から自分の思いに合うものを見つけてきていた。この時間に、伝えたい人・伝えたい思い・選んだ句については、資料４のワークシートに記入し、これをもとに、次の時間に文章を書いていくことになる。

２．第二時；俳句に託したメッセージ（手紙）を書く。

引用した句に、自分の思いを伝える文章を書くというスタイルは、生徒にとって未経験なことであるため、文章の構成や枠組みとなるもの（資料５）や、教師が用意したいくつかの文章のサンプル（資料２）を配布し、生徒が書き始めるための準備を整えた。生徒たちは、実際書き始めると、句を選ぶ

段階よりスムーズで集中して書いていた。伝えたいものと伝えたい人が明確であり、書く目的意識がはっきりとしているためであろう。また、俳句を選んだ理由や、俳句と自分の思いへとつなげる発想が柔軟でユニークであることも印象的であった。そこに、俳句という韻文学の鑑賞の幅の広さと奥行きとを改めて感じたりもした。

3．第三時：作品を紹介し合い、他の人の作品を鑑賞しよう。

それぞれが書き上げた俳句に託したメッセージ（手紙文）を４人ずつの小グループで鑑賞し合い、意見を交換した上で、それぞれのグループでクラス全体にぜひ読んでもらいたいベスト１を決めて、それをクラス全体で共有する活動である。この際、鑑賞と話し合いが効果的に進むように、進行役を各グループで決めて、進行役に細かい指示を与えた（資料８）。そして、他の人の作品を観賞するときは、批評ではなく、共感者という立場を前提とし、次の三つの観点を中心に考えるように促した。

① 選んだ俳句と伝えたい思いがぴったり。
② 俳句の鑑賞の視点（心ひかれた言葉を中心に）
② 文章の部分の伝えたい思いがよく表現されている。

グループでの鑑賞では、作品を発表している方も聞いている方も互いに懸命な様子がうかがえた。資料７のグループのメンバーそれぞれが書く一言コメントもそうした生徒の姿が表れていた。自分が一生懸命書いた作品であれば他の人の作品もまた、自ずと尊重し耳を傾けたくなるのかもしれないし、少人数のグループであることが互いの抵抗をなくしているのかもしれない。感想や意見交換も活発に行われていた。

最後にグループで選んだ作品と、その理由を簡単にまとめて（資料６）クラス全体に発表した。発表の後は、別の紙に清書し、実際に伝えたい人に送ることと、単元の学習の感想を書くことでまとめとした。生徒の伝えたい相手は、友人、親戚、お世話になった人、半年後の自分自身へなど様々であったが、家族に対してというのが意外に多かった。普段ちょっと照れくさくて伝えられない気持ちをこうした形で「手紙で伝える」方法をとることにより、抵抗感が薄らいだのかもしれない。

4．帰国生の姿

帰国生の中には、すんなりとこの活動に入っていける子もいるが、やはりこうした伝統的詩歌については、苦手意識を持つ子もいて、補助の先生から伝えたい思いについてのやりとりをしてもらったり、気持ちにあいそうな俳句の候補を挙げてもらうなどのサポートを得る中で、本人としても満足のいく作品に仕上がったようだ。

在外歴も長く、入学当初日本語の力も弱かった一人の帰国生の作品（生徒の作品２・完成した俳句手紙１）は、グループでの鑑賞会で、他のメンバーからの「是非クラスのみんなにも聞いてほしい」という思いからグループの代表に選ばれた。その生徒の単元を終えての感想と同じグループの生徒たちが書いたコメントの記載されたものを紹介しておく。この帰国生の思いとそれに応じる周りの生徒たちの思いは、国語の授業を超えた心のつながりを感じさせてくれるものであろう。

【作品についてのグループのコメント】

・この句の勇ましく強い思いを春風でオブラートに包んだように感じます。決意と感謝がとても良く伝わります。
（班のメンバーA）
・句に気持ちがとても込められていることを感じた。感謝の思いが強い決意や意志と一緒に相手に伝わるはずです。（班のメンバーB）
・闘志という単語から強い決意の気持ちが感じられました。丘を立って先を見つめているようなこの句は今のあなたの気持ちをよく表していると思います。向こうでも前を見つめてがんばってください（班のメンバーC）

【帰国生自身の学習を終えての感想】

クラスのみんなが発表したものは、全部自分自身の気持ちの表現の仕方がとても上手だと思いました。私ももっとその表現が上手にできたらと良かったと思います。けれどストレートに書いた分私の気持ちと感謝の気持ちが伝わると思いました。またみんなのメッセージも心暖まるものばかりでした。夏休み前にこれを書くことできて良かったです。とても楽しかったです。

【資料】

資料1（第１時）

学習資料　季節の俳句一覧　（　　）組（　　）　氏名（　　）

〔春〕

いきいきと三月生る雲の奥　飯田龍太
春風や闘志抱きて丘に立つ　高浜虚子
野に出れば人みなやさしき桃の花　高野素十
菫ほどな小さき人に生まれたし　夏目漱石
校塔に鳩多き日や卒業す　中村草田男
囀りをこぼさじと抱く大樹かな　星野立子
ものの種子にぎればいのちひしめける　臼野草城
チューリップ喜びだけを待っている　細身綾子
ふだん着でふだんの心桃の花　細身綾子
春ひとり槍投げて植に歩み寄る　野村登四郎
ちらちらと陽炎立ちぬ猫の塚　夏目漱石

〔夏〕

万緑の中や吾子の歯生え初むる　中村草田男
青蛙おのれもペンキ塗りたてか　芥川龍之介
夏草やベースボールの人遠し　正岡子規
夏痩せて嫁ひなものは嫁ひなり　三橋鷹女
をさなごのひとさしゆびにかかる虹　臼野草城
ひつぱれる糸まっすぐや甲虫　高野素十
滴落ちて群青世界とどろけり　水原秋桜子
訶して山ほととぎすほしいまま　杉田久女
吾子たのし涼風をけり母をけり　篠原鳳作
神田川祭の中をながれけり　久保田万太郎
目焼顔見合ひてうまし氷水　水原秋桜子
ねむりても旅の花火に胸ひらく　大野林火
夏草に機関車の車輪来て止まる　山口誓子

〔秋〕

柿食へば鐘が鳴るなり法隆寺　正岡子規
しづかなる力満ちゆき〳〵とぶ　加藤楸邨
啄木鳥や落葉をいそぐ牧の木々　水原秋桜子
わが歩む落ち葉の音のあるばかり　杉田久女
くろがねの秋の風鈴鳴りにけり　飯田蛇笏
さり気なく聞いて身にしむ話かな　富安風生
をりとりてはらりとおもきすすきかな　飯田蛇笏
桐一葉日あたりながら落ちにけり　高浜虚子
金剛の石ひとつぶや石の上　川端茅舎
つきぬけて天上の紺曼珠沙華　山口誓子
とどまればあたりにふゆる鱗雲かな　中村汀女

〔冬〕

玉のごとき小春日和を授かりし　松本たかし
ラグビーの頬傷ほてる海見ては　寺山修司
咳の子のなぞなぞあそびきりもなや　中村汀女
泣きに来し子の座りたる冬座敷　石原八束
跳箱の突き手一瞬冬が来る　友岡子郷
ふところに手紙かくして日向ぼこ　鈴木真砂女
いくたびも雪の深さを訪ねけり　正岡子規
本買えば裏紙が句う雪の暮れ　大野林火
降る雪や明治は遠くなりにけり　中村草田男
風花や突き当り夜に入らむとす　星野立子
強情を以て今年を終るなり　藤田湘子
去年今年貫く棒の如きもの　高浜虚子
初笑ひたしなめつつも祖母笑ふ　星野立子
初風呂を少し貰くなりて出る　野村登四郎

学習資料１　三年（　　）組（　　）番　氏名

○俳句に託したメッセージ（手紙）のサンプル

～青春のまっ只中にいる君へ～

夏空へ雲のらくがき奔放に　（富安風生）

富安風生のこの一句は、青く晴れ渡った夏の空に自由に雲が浮かんでいる雄大な景が目に浮かびます。この句の「らくがき奔放に」という言葉に、自由に思い切り、多少の失敗を気にせず、気の向くままにという思いが込められているようです。困難なことすらも、それは青春の一ページの証です。

今青春まっただ中のあなたに、この雲のようにどういうときにも、失敗を恐れず思い切り、自由に伸びやかに生きることを大切にしてほしいと願い、この一句を贈ります。

（２００字程度）

～進路を考えている中学三年生へ～

新しき道のさびしき麦の秋　（上田五千石）

義務教育を終えた後に進む新しい路に一歩を踏み出そうとしているあなたは、新しい世界に、期待と同時に不安や戸惑いを感じているのではありませんか。そんなあなたに、この一句を贈ります。

上田五千石作のこの一句は、目の前の麦畑の中を貫く真新しい一本道を見つつ、そこに人生の道を重ねて、新しい道を進むことのさびしさを詠んだものです。この句の「さびしき」には、新しい道（路）や世界を生きていくには、厳しさや孤独・不安というものが必ず存在するものだということが示されているようです。だからこそ、その「さびしさ」に耐える覚悟を持って、くじけたり、逃げたりすることなく新しい世界に向かって、歩んでほしいとこの句と共にエールを送ります。（３００字程度）

～ずっと会っていない幼なじみの○○さんへ～

竹馬やいろはにほへとちりぢりに（久保田万太郎）

ずっと会っていない○○さん、変わらずお元気でお過ごしでしょうか。この句を見て、一緒に遊んだ遠い日のことを懐かしく思い出しましたので、贈ることにしました。

久保田万太郎作のこの一句は、竹馬で遊んでいた幼い子供たちが、夕暮れ時に一人ひとり散っていくさみしさを詠んだものですが、「竹馬」という言葉には、自ずと「竹馬の友」という言葉が連想され、私自身が幼ないころに、○○さん達と一緒に楽しく遊んでいた様子が思い浮かんできます。この句の「ちりぢりに」に込められた夕暮れ時のさびしさは、一緒に遊んでいた友達や、その楽しい時間から別れを告げて家に帰らなければならないという子供のころの私のさびしさにも重なるようにも感じられます。幼い日の○○さんとの思い出は、この句と共に大切にしていきたいと思います。

資料2（第２時）

資料3(第1時)
単元の流れ

三年国語　(　　)組(　　)番　氏名(　　)

俳句に託したメッセージを贈ろう

●贈りたい人への伝えたい思いにぴったりの句を選んで手紙を書き、メッセージとして贈ろう。

学習の進め方

第一時：贈りたい相手、伝えたい思いにふさわしい俳句を選ぼう

1　単元の学習活動についての説明。
・俳句手紙のモデル文を見る。
・準備した図書資料を使う。
　*選ぶ俳句　「近代俳句」原則（明治以降のもの）
・資料として用意したものの中から選ぶことを基本とするが、それ以外のものでも良い。
・俳句は、必ず資料で解釈などをきちんと調べること。

2　a　資料を使って句を選ぶ。鑑賞する
　b　贈りたい人・伝えたい思いを考えて決める。

第二時：俳句についての鑑賞と伝えたい思いをまとめて、メッセージを書こう

3　選んだ一句を詳細に鑑賞しまとめる。
　俳句・作者名
　季語・季節
　心ひかれた言葉について
　鑑賞
　(句の情景や意味するところ。込められた思いなど)

4　俳句手紙を書く。
・3の句の鑑賞をもとに、伝えたい思いや句を選んだ理由を加えて文章にまとめる。

第三時：俳句メッセージを紹介し合い、鑑賞しよう

5　学習班で作品を紹介し合い感想を述べあう。

6　クラス全体で作品を紹介仕合い、贈られて感動する俳句手紙について考える。

*最後に実際にその相手に清書した俳句メッセージを贈ります♪

資料4(第1時)選句と構想シート

学習のてびき1　三年(　　)組(　　)番　氏名

俳句に託したメッセージを贈ろう

●贈りたい人への伝えたい思いにぴったりの句を選んで文章（手紙）にし、メッセージとして贈ろう。

学習の進め方の2・3

①②③を決めるのはどれが先でもいいです。自分がやりやすい順番で。

ア　贈りたい一句・作者

イ　季語・季節

ウ　心ひかれた言葉・それについての感想や考え

エ　詠まれた情景や意味するところ・作者の思いなど（資料で調べる）

①　一句に託して（方法）

②　贈りたい人（相手）

③　伝えたい思いの中心（内容）＊自分自身のこと（思い・状況）をその人に伝えるということでもよい。

資料5(第2時)メッセージのアウトライン

学習のてびき2　三年(　　)組(　　)番　氏名

俳句に託したメッセージを贈ろう

●贈りたい人への伝えたい思いにぴったりの句を選んで文章（手紙）にし、メッセージとして贈ろう。

学習の進め方の4　俳句のメッセージを書く。

○学習のてびき1の①ア・ウ・エと③にまとめたことをもとに、つなぎや順番を工夫して俳句エッセイの下書きをしよう。

◎メッセージの文章に入れるべきこと（1～5の要素の順番はとわないので、変わっても可）

1　贈りたい一句・作者

2　句の意味や情景・作者の思いなど「――――ということを詠んだもの（という意味）です。」

3　心ひかれた言葉について（込められた思い・自分の考えなど）
　「――――には――――という意味が込められています。」

4　伝えたい思いや選んだ理由
　「――――という気持ちで（願って・理由でなど）」

5　伝えたい相手への一文
　「――――（伝えたい相手）なあなたに、この一句を贈ります。」

俳句メッセージ下書き（1～5の要素を含めて。200～300字程度を目安に）

資料6(第3時)：班での話し合いシート

(　　)班の俳句メッセージを鑑賞する話し合い―共感者として―

メンバー(　　・　　・　　・　　)

・決まった俳句メッセージの作者

・俳句と句の作者

・この作品に決まった理由

三つの観点　この観点を中心に鑑賞し、意見を出し合おう

①　選んだ俳句と伝えたい思いがぴったり。（ここが一番感動）
　「うんうんなるほど、わかるわかる」

②　俳句の鑑賞の視点（心ひかれた言葉を中心に）
　「そういう視点もあるのか」「へ～鋭い～（深い・ユニーク）」

③　文章の部分の伝えたい思いがよく表現されている。

資料7(第3・4時)コメント・感想シート

学習のてびき3　三年(　　)組(　　)番　氏名

俳句に託したメッセージを贈ろう

●俳句メッセージを紹介し合い、鑑賞しよう。

贈った句

学習班で発表したときの他のメンバーからの感想コメント

(　　)より

(　　)より

(　　)より

●「俳句に託したメッセージ」の学習を終えての感想
（自分自身の作品創りや他の人の発表の鑑賞したことについて）

資料８（第３時）話し合いの進行の仕方

俳句に託したメッセージを贈ろう

●俳句メッセージを紹介し合い、鑑賞しよう。

学習班での鑑賞会の進め方―進行係はこの手順で。うまく鑑賞会を進めよう―
時間通りに進行できるよう、気をつけよう。

合計＝17分

＊始めに役割を決める。
進行（1）―以下の司会を進める。
記録―（1）２の話し合いの要点を記録
発表―（2）班で全体に紹介する作品を発表する。（作品を読む人・理由を述べる人）
＊ 班の中で誰の作品になってもこの発表者が、全体に発表する。

1．それぞれの俳句手紙を紹介する。（音読する）―8分
・他のメンバーは、共感者の視点で聴く。
（自分がもらう立場として共感するところは）
・一人の人が発表を終え時点で必ず、俳句やメッセージの内容・贈る相手等についての質問の時間をとる。
・四人全員が発表し、質問が終わったら、コメント用紙を回しながら他の人の感想を書く。（コメントを書く時間は一人当たり1分以内で）

2．作品について話し合う。―7分
・次の三つの観点や書いたコメントを参考にしながら、それぞれのメッセージ文のいいところ、感じたことについて意見を出し合う。（批評ではなく、良いところに焦点を）
＊進めるときに、三つの観点ごとに意見を出し合うか、その人の作品ごとに三つの観点について考えるかは、進行係にまかせます。班で話し合いやすいように。
・どの作品もそれぞれ良さがあり、もらった人は嬉しいと思いますが、話し合いで出てきた意見の中から、自分たちの班としては、こういう理由で、この作品をクラスみんなに紹介しようというものを決める。

3．全体発表の準備―2分
・記録係は紹介する作品の俳句と俳句の作者を掲示用短冊に書く。
・発表者が以下のような形で発表できるようにまとめる。
「○○班は、○○さんの俳句メッセージを紹介することにしました。
贈る俳句は――――（俳句の作者）で――――という句です。では○○さんの作品を読みます。」
作品を読んだ後、自分たちの班がなぜこの作品をみんなに紹介するのか理由を述べる。

生徒の作品１
資料6の話し合いでシートの一部

・俳句と句の作者
春風や闘志いだきて丘に立つ　高浜虚子

・この作品に決まった理由
[redacted]さんの強い意志が伝わってきました。
別れを悲しむこともなく、前向きに自分の将来を考えていて
みんなに聞いてほしいと思ったからです。
先生に対する感謝の気持ちもストレートに伝わってきました。

【生徒の作品】

・俳句と句の作者
日焼顔　見合ひてうまし　氷水　水原秋櫻子

・この作品に決まった理由
「氷水」という言葉から思い出に広げていって、俳句を思い出がよく合っている。友達と遊んだことがこの俳句とよく似ていて鮮明に伝わってくる。「かき氷を食べたいですね。」と呼びかけていてその気持ちがよく表現されている。

生徒の作品2
完成した俳句手紙　1

～お世話になった先生方へ～

春風や闘志いだきて丘に立つ　高浜虚子

この句からは高浜虚子の強い意志を春風の丘に抱いて立つ姿が目に浮かびます。

私は今までたくさんの先生方に丁寧に教えてもらい小三以上の漢字を読めなかった私が今になっては一人で教科書を読めるようになりました。勉強だけでなく色々なことにおいて成長することができました。そして、今まで学ぶことが出来た能力を活かしながら新しい道を歩み出します。

私は、自分の強い決意と今まで暖かく見守ってくださった先生方にこれから「頑張っていく」ということを伝えたくこの句を選びました。

そこでこの句にある「闘志」という言葉に心をひかれました。その理由は、私がこれから前向きにつらいことがあっても乗り越えて頑張っていきたいという気持ちが込められているように感じとりました。

本当に感謝してります。

今までありがとうございました。

向日葵の　空かがやけり　波の群

水原秋桜子

この句は作者が南房総の波太で詠んだ句です。向日葵とまぶしく輝く空と海の風景は作者が好んだ風景です。

向日葵と海の風景は日本の夏を感じられます。ジャカルタにいるお父さんに日本の夏の飾れを伝えたいと思いこの句を選びました。

連日の暑さの中向日葵は真っすぐに伸び日光を浴びてたっています。私も向日葵のように強く真っすぐに立って日々成長したいものです。まだまだ未熟な私ですが、お父さんが帰ってくるころにはきちんと自立した姿を見せたいものです。

年中暑く英語を使うことも大変だと思いますが頑張って下さい。

お父さんへ

～民泊でお世話になった大森さんご一家へ～

涼風や青田の上の雲の影

(森川許六)

夏の生い茂る田が風にゆれるのどかな情景を詠んだ、森川許六の句です。私は「青田」ということばを見て、大森家のかなさんが育てる稲のことを思いだしました。今、大森家の田では、こんな風景が見られるのではないでしょうか。そんなことを考えて、この句を送ることにしました。古民家再生や日々の農作業をこれからも元気につづけてほしいという思いをこの句にこめます。

遠野の地で、再び古民家再生を手伝い、穏やかな日々を過ごせることを心待ちにしています。

生徒の作品
完成した俳句手紙　2(左)・3(右)

V　考察と課題

1　考察

生徒たちの「学習を終えての感想」（資料７の最後）を紹介し、分析することでこの授業の考察をしていきたい。

（1）生徒の感想抜粋

選句と作品作りについて

ア　俳句の鑑賞と自分の思いを重ねて文を作るということは、とても新鮮で難しくもあり楽しくもあった。

イ　句を添えることで普段は恥ずかしくて、正面から言えないようなことでも伝えることができたと思います。

他の人の作品を鑑賞して

ウ　他の人の発表では本当に相手への思いがこもっていて実際にもらう立場でないのに聞いていてうれしかった。

エ　色々な人が家族に日頃の感謝をしたためていてあたたかい気持ちになった。

オ　様々な人の違う一面を見ることができました。

俳句の持つ力について

カ　言葉ではなかなかうまく伝わらないことが俳句の力を借りることで、相手に伝えられることもあるのかと知ることができました。

キ　俳句が手紙に入るだけで手紙そのものが味わい深くなり、思いの伝わり方も大きく違うことに驚きました。

ク　昔は、句や歌（和歌）だけを相手に贈ることで気持ちが通じ合っていたと思うと日本語には奥深さや味があるなと感じた。

ケ　俳句手紙は暑中お見舞いなどのあいさつにもぴったりだと思います。

コ　同じ句でも贈る人や立場が違うと、全然違った印象になるので面白いと思いました。

この単元学習全体について

サ　自分自身も改めて心を入れ替えて前に進んでいこうとすることができたので心に残る授業でした。

シ　共感できる句をもっと探してその句をポストカードに書いたりして人に贈りたいと思った。とても楽しい授業だった。

ス　いつか手紙を送る際に、一つ気に入った句を添えてみたいと思います。

帰国生の感想（二人の生徒の全文抜粋）

セ　俳句を通すことでいつもだったら言えない素直な気持ちが手紙で送れるなと感じました。どの人も思い出を大切にして一語一語ていねいにとらえていてどの人もあたたかい手紙だと感じました。おじいちゃん、おばあちゃんにこの俳句にたくしたメッセージが伝わるといいです。俳句を深く鑑賞してやっぱり俳句はいいなと改めて思いました。

ソ　クラスのみんなが発表したものは、全部自分自身の気持ちの表現の仕方がとても上手だと思いました。私ももっとその表現が上手にできたらと良かったと思います。けれどストレートに書いた分私の気持ちと感謝の気持ちが伝わると思いました。またみんなのメッセージも心暖まるものばかりでした。夏休み前にこれを書くことできて良かったです。とても楽しかったです。

（2）考察と成果

国語の力の優劣を超えて作品作りを楽しみ、互いの作品を鑑賞してほしいという願いであったこの単元に対して、生徒達の活動の様子や授業後の感想の中に、教師が期待していた以上のものが見られた。

この単元全体のねらいの一つである「伝えたい思いとそれに合う俳句を探す」という作業が生徒にとって一番難しいと感じたようであった（生徒の感想ア）が、明確な目的や相手に向かって、必然性のある少し挑戦しなければならない課題や学習活動であれば、生徒は意欲的に活動し充実感や達成感を得て、学ぶ楽しみを味合うことができるのだということがわかる（生徒の感想サ・シ）。

ねらいの二つ目の「俳句メッセージを書く」、「鑑賞会で交流する」ことについては、普段見られないような生徒の一面や優しさが伺えるような素直な気持ちを作品に表現してくれていることや、グループの作品や他のグループの作品を鑑賞する際にも、互いが、それぞれの作品を尊重し、真剣にあたたかく受け止めている様子も印象的だった。（生徒の感想イ～オ）各グループが選んだ理由も作品の優劣を超え、人間としての心の部分を大切にしているものであって、私自身、生徒の鑑賞会を見ていてあたたかい気持ちになった。

俳句の持つ機能を活かし、実生活につなぎ、役立てていこうとする学習の発展が見られたり、（生徒の感想シ・ス）特に教師自身は触れたことでもなかったのに、生徒自身が俳句の特性に気づき、その本質的なこと―省略され凝縮された文学・挨拶の言葉・句の受け止め方に幅と奥行きがあるなど―に自ら言及したりなど（生徒の感想抜粋のカ～コ）は予想以上のことだった。生徒自身の主体的で探求的な学びでは、教師が前に立って説明しなくても、生徒自身が自ら学んでいけることがあるということを実感できた。夏休み明けに、送った俳句手紙に返事をもらった生徒が、私のところにもってきて見せてくれるという微笑ましい姿も見られ、学習したことが、日常生活にも広がりを見せていることを感じた。

（3）課題

本単元の第３時のメインの活動であるグループでの話し合い活動としては、他の人の鑑賞をしっかりとし、感想や考えを述べるという点で、活発に話し合っていたグループが多かったが、「贈る相手により伝えたい思いが伝わり、共感できる俳句手紙」という視点で鑑賞を深めるための話し合いとしては十分とは言えなかった。その解決策として、話し合いの時間が十分とれるよう時間配分を検討すること、話し合い中に書く作業に気をとられないよう書く・話すの活動のバランスをうまく考えること、進行役の力量によって話し合いの状況が異なるので、「話し合いを進行する力」を育てること、鑑賞を深めるための話し合いの観点をより明確にし、グループによって話し合いの深まるポイントになるような投げかけをタイミングよく教師が行うことなどが挙げられる。

今回の単元そのもの内容と実施に関して検討すべきこととして、二つ考えられる。一つは、３年間続けて持った集団であるため、２年生の時から継続的に長期に渡って俳句に関わる学習をやってきたという素地や環境があったことが本単元が実施できたことの一つの条件になっている。しかし、もしもこうした環境でない場合、このような単元学習を実施して成果が期待できるかというところが疑問となるところである。これは、この実践を他校の先生に話したときに投げかけられた疑問でもあった。常に教師が３年間や２年間続けて同じ集団を持つことができるとは限らない。３年生で初めて持つこともある。俳句に関してほとんど素地がないときに、こうした単元を試みた場合に、成果をあげるにはどうしたらいいかという課題である。二つ目は、俳句には季語があり季節があるため、それを無視

できないということである。つまり伝えたい思いにぴったりの句が見つかった場合、それが今のその時期のものであれば、すぐに送ること、相手に渡すことができるが、違う場合、その季節までは送れないということになってしまう。季節にあって、しかも伝えたい気持ちにぴったりという二つの条件を満たすものを見つけることはさらにハードルが高い。今回はとにかく伝えたい気持ちに合うものであれば、今の時節の句でなくも良いことにしたが、本来は、それは俳句の扱いとして不適切なわけでその部分をうまく解決していく必要がある。

さらに俳句の軸となる季語は「風土や文化に裏付けされた言葉の宝庫」であり、それを修めている「歳時記」をもっと生徒にとって身近なものにし、活用していけるように取り組んでいきたいと考えている。それは生徒たちの言葉の感覚をより豊かにし、俳句の鑑賞をさらに深めていくことにも役立つはずである。

Ⅵ　終わりに

卒業式の卒業生代表の謝辞の中に、入学当時を振り返ったときと今の思いを述べた生徒自身の作った二つの句が入っていた。

・入学や服も期待も大きくて

・巣立ちの日涙でかすむ青い空

国語の授業ではない日常生活の中で、その場に適した挨拶の句がすんなりと詠めるところは俳句への取り組みの成果の表れともいえる。

「言葉感覚の幅と奥行きを広げ、言語生活を豊かにしていくこと」や「国語の力の優劣を超えて」表現したり鑑賞したりということを願って取り組んできたが、必要な時であれば、その時候や場に応じた俳句が作れるという力がついていることや、3年生のこの単元で、生徒達が充実感を持って終えてくれたこと、帰国生の中にも「俳句はいいな」と感じてくれたり、「これを書くことができてよかったです」という言葉が出てきていることに、意義を感じている。

こうしたことが、日常の生活の中で実際に活用しようという姿勢につながったり、将来高校・大学・成人となって、どこかでまた俳句と出会った時に、俳句と関わっていく力につながっていくことを信じたい。中学生で充実した学習体験を持ったことは、将来的にそれに関わることにプラスの印象を持つであろうし、何より「抵抗感」も薄らぐであろう。それがいわゆる「生涯学習」にもつながっていくきっかけにもなるのではないかと思っている。自分自身、学生時代に句作と出会ったことで、現在でもささやかながら句作を続け、それが思い出のスナップ写真がわりとなている。作った句を見ればそのときの情景が鮮やかに蘇るし、頭の中で五・七・五を考えることによって様々な出来事や情景を客観的な視点で眺めている自分に気付くこともある。そうしたことが、自分の生活をより豊かなものにしてくれていることを実感する。少しでも多くの生徒たちが将来、同じようなことを感じてくれればとも願っている。

これからもより多くの生徒が「新鮮・楽しい・心に残る」という充実感を感じる学習の場をつくっていけるように取り組み続けていきたい。

【主な参考図書】

「きょうの一句」（村上　護著）　新潮文庫
「現代の俳句」（平井照敏　編）講談社学術文庫
「教室でみんなと読みたい俳句８５」（大井恒行著）　黎明書房
「知っておきたいこの一句」（黛　まどか著）　ＰＨＰ文庫
「子どもたちワハハの俳句探偵団」（佐藤広也著）労働旬報社
「俳句の授業を楽しく深く」（西田拓郎・高木惠理著）東洋館出版社